

倫理と道德教育の基礎づけについて

——ノディングズのケアリングの倫理を手がかりとして——

小林 秀 樹

はじめに

哲学あるいは倫理学が道德教育や倫理教育^①に対しどのような貢献をなしているか。この問題については学会等において継続的な議論がなされている。そこで問われるべきは、道德（もしくは倫理）に対しアプローチする哲学的探究およびその成果が、道德教育にどのように関連し、どのような貢献をなしているかということであろう。

筆者が同様の問題意識を持つに至ったのは、生命倫理を教える際のスタンスについて考察し、またそのことから道德、倫理学、および道德教育の関わりについて関心を深めてきたことによる。それは次の二つの点を通じてであった。

第一の点は、倫理学が倫理規範や道德性を探究の対象とするのに対し、道德教育は倫理学が探究の対象とするものの自体の育成を企図しているが、両者はどのような関係にあるのか

という関心である。一般に生命倫理学における議論では、生命に帰される尊厳性・不可侵性という価値（「生命の尊厳」）やその生命を尊重する姿勢（「生命尊重」）は前提とされあまり問われることがない。しかし「生命の尊厳」を自覚し、「生命尊重」の姿勢を身につけることは、「生命に対する畏敬の念」を目標に謳^③う道德教育に期待されるものである。「生命のかけがえのなさに気付き、生命あるものを慈しみ、畏れ、敬い、尊ぶこと」を一つの倫理（エートス）と呼ぶならば、この倫理を知らしめ、生き方のうちに深く根を下ろさせる道德教育とは、倫理学とどのような関係において捉えたらよいかが問題となる^⑤。

第二の点は、「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いが議論されたことにも見られたように、道德的であることの理由をどう説明したらよいのか、またその説明は質問者に対してどこまで説得力を持ちうるのかという疑問である。第

一・道德、道德教育、倫理学の関係

一の点とも関連するが、この問いに説得力ある回答を提示できれば、質問者は道德的な方向へ（この場合は殺すことを考えない方向へ）向かうかもしれない。この問題はより一般化した形で言えば、「なぜ道德的であるべきか」という問いにどう答えうるかという問題である。

本稿はこうした課題に全て答えようとするものではない。本稿で試みられるのは、「なぜ道德的であるべきか」という問いについて、ウィリアム・K・フランケナとN・ノディングズの議論を手がかりに倫理学と道德教育とのかかわりにおいて考察することである。

そのためにまず、従来道德教育がどのように道德を捉え、倫理学との関係をどのように捉えてきたのかを確認する（第一節）。次に、道德をめぐる現代の状況をよく反映した問い、すなわち「なぜ道德的であるべきか」という問いを取り上げ、フランケナによる正当化とその限界について確認する（第二節）。このフランケナの議論が持つ限界に対し、ノディングズのいわゆる「ケアリングの倫理（an ethic of caring）」が、倫理と道德教育を基礎づける思考として、どれだけの妥当性をもつかについて検討し（第三節、第四節）、本論の課題への応答を試みたい（第五節）。

まず従来道德教育が道德をどのように捉え、倫理学との関係をどのように捉えてきたかについて確認する。

一般的な道德教育の概説書においては「道德 morality」や「倫理 ethics」の語源的考察を経て、デューイによる「慣習的道德」と「反省的道德」の区別を採用するものが多い。例えば加賀は、道德や倫理についてその語源から説き起こし、共同体や人間関係が「安住した住処であるために、半ば自然発生的に生じた習俗や規範」であり、「習俗や規範を我がものとした人の性向や性格であった」とする。その上で、自然発生的で慣習化された道德を「慣習的道德」、慣習的道德が深刻な疑念にさらされる場合の道德の在り方を「反省的道德」と呼んで区別し、この反省的道德が体系的に行われる場合を道德理論や倫理学と呼ぶ。

そして道德教育は、もっぱら慣習的道德に関わる場合、模範や制裁などによる習慣づけを方法として、道德の内面化を目的としたものになる。またその一方で、道德教育が反省的道德の涵養に関わろうとする場合には、批判的思考や合理的選択が重視され、道德的判断の合理的根拠が追求される。このとき反省的道德は慣習的道德を対象化し、その妥当性の根拠を問うことになる。このようにして、「人間は何をなすべ

きか」「行為の善悪を決定する究極的基準はなにか」という問題を主題的に探究するのが規範的倫理学とされる。

こうした理解に倣うなら、規範的倫理学の営みやその成果としての道徳理論は、慣習的道德を正当化あるいは批判し、合理的に乗り越えていく上で有効な力を発揮することとなる。規範的な道徳理論について学ぶことは、一人ひとりが何を重視し、いかに生きるかを自律的に判断していく上で意義があるだろう。

しかし道徳をめぐる現代の状況は、従来の伝統的な規範倫理学の枠組みを素朴に適用できるような状況にない。価値の多元化が進む中、先に述べたような「慣習的道德」はその基盤を失い、倫理的な相対主義や利己主義が主張されるようになっていく。こうした状況において、「なぜ道徳的であるべきか」という問いも問われてくる。

この問いは倫理に関する「合理的エゴイズムからの挑戦の問い」と呼ばれ、「合理的に答えるか否かに、倫理学の将来がかかっている」とも言われた。また、この問いにどのように答えるかは、道徳教育にとっても非常に重要な問いであろう。なぜならこの問いは、道徳をめぐる教育的営みの根幹を問い尋ねているからであり、さらにこの問いは、道徳に対する懐疑の声としても発せられるからである。

二、なぜ道徳的であるべきか Why be moral?

この問いは、かつて日本においても広範な論議を呼んだ。ここでは倫理学と道徳教育の両者についても論じているウィリアム・K・フランケナによる考察から、この問いに対する回答について考察を試みることにしたい。

フランケナは「なぜ私はAを行うべきか」という問いが曖昧であると指摘する。それはこの問いが「私がAをするどんな動機があるか」、すなわち「動機づけ (motivation)」を問うているのかもしれないし、「私は実際道徳的にAをするように義務づけられているのか」、すなわち「正当化 (justification)」を問うているのかもしれないからである。

そこでフランケナは、この「なぜ道徳的であるべきか」という問いによって問われているものを四つに分類する。すなわち①道徳的に正しいことをすることの動機、②道徳的に正しいことをすることの正当化、③道徳的観点を取ることに、また、それ以外の仕方で人生の道徳的制度に賛意を表すことの動機づけ、④道徳及び道徳的観点の正当化である。

このうち①と③については、処世の思慮 (prudence) などに根ざした道徳外の動機を挙げることによって答えられる。また②については正当化が道徳的な意味であれば、「道徳的に正しいことをする」のであるから正当化は必要でな

い。それでも回答を求めるのであれば、問われているのは道徳とは無関係な正当化ということになり、これは結局④の問いに帰着する。

この④の問いについてフランケナは、この問いの先駆者であるK・ニールセンと同様に、⁽¹⁴⁾「なぜ社会は道徳という制度を採用すべきなのか」という問いと、「ある個人が道徳的な考え方や生き方をとるということにはどのような道徳外の理由(単に動機ではない)があるか」、すなわち「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いとに分けて問う。

最初の問いについては、道徳を採用しない場合にはホップズにおける自然状態に陥り、人間生活の条件が得られないのだとし、道徳の採用が正当化される。しかし後者については、道徳的な生き方が私の利益になるにしても、いつもそれにしたがって行動すべきであるということにはならない。その結果、「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いについては、「ある種の人々(some individuals)に対しては必ずしも道徳を正当化できないかもしれない」(p.115)とフランケナは結論づけるのである。

しかし、彼は正当化が完全に不可能だとそのまま結論づけるわけではない。フランケナは先の文に続けて、「しかし一個人(an individual)に対して道徳の道を正当化することができない、という結論にはならない」(p.115)という。

フランケナは、ある人物Aがある人物Bに、「なぜ自分は道徳的であるべきか」と尋ねる場面を想定し、Bが次のようにAに対して要求することで回答に代えうると考える。すなわち「もしAが理性的に選ぶとしたならば、いいかえれば、自由に、公平に、道徳的な生き方も含めて他のそれにかわる多様な生き方をするのがどのようなものを十分知った上で選ぶとしたならば、どのような生き方を選ぶとするか」(p.115)と。

ここでフランケナはどういうことを意図しているのだろうか。この点を理解するためには、フランケナの言う道徳外の正当化に関する考え方について理解が必要であろう。

フランケナによれば、道徳的に正しいということは一種の卓越性であり、道徳外の意味においてもその活動を内在的に善にする要素であるという。したがって、例えば処世的に損をする場合があっても、道徳的に正しいということ自体には卓越した価値があり、「内省的方法で考察し、それをよいとするようになれば、それを内在的に善であると判断することは合理的に正当化される」(p.111)のである。

フランケナはこうした内在的価値判断の正当化により、道徳的な生き方を道徳外の評価の観点から正当化することができる。先の問いの場合、このときAが平静で冷静であれば、道徳的な生き方も選択肢に含まれていることをBはAに

納得させることができるかもしれない。そしてAが納得したならば、BはAに対して道徳的な生き方を正当化したことになるというのである。

フランケナの別の著作⁽¹⁵⁾でも確認してみる。フランケナは、「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いを、背徳主義者(immoralyzer)や道徳廃棄論者(de-moralizer)が問う場合と、「自分の持つ信念の根拠を尋ね求める道徳信奉者の精神」(p.154)が問う場合とにわけて論じている。前者に対する問いの正当化については、「不可能」という見通しが示されるが、後者については有意義な問いであるとされる。すなわち「彼は道徳が不合理でないと思っているが、なぜそうではないのかを理解しようとしている」(p.154)のであって、その人物は、道徳的であることが「理にかなっているかどうか」を理解したいがゆえに、そうした問いを問うているとする。

ここでフランケナは、道徳的であることが自分の利益と対立するような状況を考えるよう促す。そしてその状況においてなお、われわれが「何をなすべきか」と自らに問いただすことができるという点について注意を喚起する。つまり、われわれは自分が損をする状況においても、なお道徳的であることを選択する(選択肢に入れる)ことがあるのである。このとき、われわれは、道徳的であることを端的によいものと評価し、他との比較のうちに選択している。つまり、この場

合の「何をなすべきか」とは、「もし、完全に明晰で、自分自身や関係するすべてのことを十分知っているとしたら、人は視野に入るもののうち何を選ぶだろうか」(p.163)と、尋ねることを意味しているのである。

ここで問い返されているのは、「理性的」というこの意味である。言い換えれば、ベストでない結果を招いたり、犠牲を招いたりするようなことは、決して「理性的」とは言えないのだという、この言葉の意味に含まれている前提である。フランケナが論駁したい対象とは、「自分の側になんらかの犠牲を含んでいたり、自分にとっての最高の得点よりは低い結果をなしたり、そうなるだろうと予想しうる行動過程を追求することは、決して理性的ではないという想定」(pp.163-164)なのである。

結局、心理学的利己主義を否定するフランケナは、「すべてを考慮した上で、その人生の側に道徳があるというまさにその理由によって、最高得点をもたらずものではない人生を人は選ぶかもしれない」(p.170)という。こうしてフランケナは、何人かの人々にとっては、「道徳的であることは理性的なこと」すなわち合理的な選択対象として、正当化されると断言する。

しかしフランケナは、道徳的であることを選ぶ人について、それは「その人が、どのような種類の人であるかに依存

する」(p177)という。しかし、自分がいかなる種類の人間であるかを確実に知ることは誰にもできない。それゆえフランケナは、「道徳的であろうとする人は、それを肯定しなればならない」のだと述べ、これをもって「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いへの回答とするのである。

以上、「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いに関するフランケナの議論をたどってきた。フランケナによる議論から分かることは、すべての人に向けた正当化はできないということ、しかし証明も反証もできないものの、人はその本性によって道徳的であることを選択すべく作られていると仮定することはでき、道徳的であろうとする人はそれを肯定するよう求められていることである。

しかし、そもそも道徳的であることを選択するという特質は、どのようにして備えられたのか。それは生得的なものなのだろうか。しかし、もしそれがある種の人にのみ生得的なものであれば、すべての人が「本性によって道徳的生活を選ぶように作られている」と仮定しようとするフランケナの思考とは矛盾してしまう。するとフランケナの考えには、道徳的であることを選択する本性をもちながら、その選択をする人になるかどうかは、何らかの後天的な問題とする理解が暗黙のうちにあるように思われる。そうであるならば、どのようにして道徳的であるようにするかは道徳教育の課題である

はずなのである。

フランケナでは正当化できず、動機づけが問われない。これに対し、N・ノディングズは「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いに対し、正当化よりも動機づけを中心として論じている。そこで次にノディングズによるその問いをめぐる議論をみることにしたい。

三、ノディングズのケアリングの倫理

ノディングズにおける「なぜ道徳的であるべきか」についての考え方を見る前に、まずは彼女のケアリングの倫理の概要を『ケアリング 倫理と道徳の教育―女性の視点から』⁽⁶⁾に基づいて確認する。

C・ギリガンがあげた『もうひとつの声』は、L・コールバーグによって男性を中心に論じられた道徳性の発達理論に対する女性からの異論の「声」であった。ギリガンは、女性には女性特有の道徳性の発達があることを実証的に明らかにしようとし、男性特有の道徳の捉え方、またそれにより把握される倫理を「正義の倫理」、女性特有の道徳の捉え方、またそれにより把握される倫理を「ケアの倫理」と称したのである。

ノディングズはこうした背景を踏まえ、女性の視点から道

徳性に関する哲学的探究を行う。彼女はあくまでも倫理学が「道徳的推論を中心に行われてきた」(p.1) こと、また教育では、男性側の「支配的なモデルによって道徳的推論の段階的な図式が提示されている」(p.1) ことにより、道徳性についての探究が、実際の人間の活動とかけ離れてしまっていることを批判するのである。

ノディングズが倫理の探究の基礎とするのは「ケアする人 (one-caring)」と「ケアされる人 (cared-for)」との間の精神的な「関わり (relatedness)」⁽⁷⁾「ケアリング (caring)」である。この人間関係は、われわれにとつての「存在論的な基礎であると同時に倫理的な基礎」(p.3) であり、この関係における情感のこもった反応やその記憶が、倫理的な行動の本当の源泉になるとされている。

ノディングズはこのケアリングを「自然なケアリング (natural caring)」と「倫理的なケアリング (ethical caring)」⁽⁸⁾とに分ける。まず自然なケアリングとは、「私たちが、愛や、心の自然な傾向から、ケアする人として応答する関係」(p.3) であり、「意識的にせよ、無意識的にせよ、「よい」と感じるような人間的な状態」(p.5) であると同定される。

真のケアリング関係においては、ケアする人の「専心没頭 (engrossment)」と「動機の転移 (motivational displacement)」がある。ケアする人はケアされる人を「受け入れる (receive)」

ことによって、「私はしなければならぬ (I must)」というケアへの要請を生じるとされる。この自然なケアリングにおいて生じる「私はしなければならぬ (I must)」は、同時に「私はしたい (I want)」と区別されないような心情であり、ケアする人を自然にケアリングへと向かわせる。ノディングズはこれを「第一の心情 (sentiment)」と呼ぶ。

一方、ケアされる人はケアする人を受け入れ応答することによってこの関係を充足する。こうして完結するケアリング関係は、「助け合い (reciprocity)」の関係でもあるが、その関係は「よい状態」として評価され、「喜び」という「情感 (affect)」⁽⁹⁾あるいは「感情 (feeling)」を生み出すことになる。ノディングズによれば、こうして看取される自然なケアリングが持つ「よさ」は、他のケアリングにおいてもわれわれの思考を暗に導いている。このよさはケアしケアされた経験を持つわれわれに、ケアリングの理想像やケアリングにおける理想的自己像を形作るのである。

しかし、実際には、すべての人間に対して自然なケアリングが生じるわけではない。私たちはだれについても「気にかける (care about)」ことはできるが、すべての人に対して世話をしたり面倒を見たりする「ケアすること (caring-for)」⁽¹⁰⁾ができるわけではない。また、現実の自己と理想的な自己との間で葛藤が生じることもある。例えば、相手への心痛と自

身の欲望とが葛藤を生じる場合や、相手の苦境を理解できても相手を好まないため、自然なケアリングの心情が生じないといった場合である。

このとき現実の自己と理想的な自己像との間でケアに向けて揺れる自己を、ノディングズは、「倫理的自己 (ethical self)」と呼ぶ。ノディングズによれば、「倫理的自己とは、現実の自己と、ケアしケアされる人として理想的な自己像 (vision) との間の動的関わり (active relation)」(p.49) とされ、「私の可能な理想像を受け入れることで、『私はしなければならぬ』は、倫理的な自己に関して生起する」(p.50)。このときに生じるケアリングが、「倫理的なケアリング」と呼ばれるのである。

ノディングズはこの倫理的ケアリングを二つの場合に分けて論じる。一つは (1) 自然なケアリングと異なつて、ケアをめぐつて「私はしなければならぬ」と「私はしたい」が葛藤し、選択を迫る場合である。もう一つは (2) 「私はしなければならぬ」が生じないか、極めて弱いような場合である。

どちらのケースにおいても、自然なケアリングに基づいて構築される理想が、ケアする私にとつての規範的役割をなうことになる。この理想は、特に「倫理的理想」と呼ばれるが、この理想を思慕し追求するものとして、私は「ケアする

人として自らをケアする」ことになる。「ケアする人として自らをケアする」ということの意味は、あくまで私が「ケアする」ことにとどまり、「ケアする人として振舞おうとする」ことを意味している。

ノディングズによれば、こうしてケアする人としての私は、(1) の場合には葛藤の中からも「私はすべきである (ought)」という偽りのない道徳的心情を生じるのであり、また (2) の場合には、ケアする関係と他の形式の関係 (ケアしない関係) を比較評価する中で、倫理的理想に導かれて道徳的な「しなければならぬ」という心情を生じるのである。ノディングズは、この倫理的ケアリングにおいて生じる道徳的心情を「第二の心情」と呼び、第一の心情と区別している。以上、ノディングズのケアリングの倫理についてその概要を述べたが、次にノディングズが「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いについてどのように考えるかを見ていくことにしよう。

四. ノディングズにおける

「なぜ私は道徳的であるべきか」

フランケナにおける考察と同様、「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いに対して、ノディングズによるケアリン

グの倫理について、正当化と動機づけという側面から検討する。

まずノディングズ自身は、直接的に「なぜ私は道徳的であるべきか」というような問いを立ててはいない。むしろこの問いは、ノディングズにおいては問われる必要のない問いといえるかもしれない。なぜならノディングズは、「愛」や「自然な傾向性」、更には生得的な「他人のために行為したい」という衝動」(p.88)をわれわれの本性とし、その上で存在論的・倫理的基盤であるケアリング関係のうちに立ち上がってくる倫理的自己(道徳的行為者である私)を位置づけているからである。

ノディングズは、「他の人たちをケアし、そうした人たちにケアされるとき、私は自分自身をケアできるようになる」(p.89)と述べている。また同様に、「自己、倫理的自己に対するケアリングは、他の人々に対するケアリングの中からだけ立ち現れてくる」(p.91)とも述べている。ケアする人は「よい状態」である自然なケアリングの関係から倫理的理想を持つのであり、その倫理的理想への高まりや切望において、道徳的観点あるいは道徳的態度を自己にもたらす。こうして倫理的自己としての私は、ケアする人として自らをケアすることができるのである。

したがって、ノディングズのケアリングの倫理において

は、倫理的自己としてケアする人は、すでにケアリング関係の充実を志向する道徳的主体であり、したがって道徳的観点あるいは道徳的態度を備えているといえる。つまり、そうした主体である「私」が、道徳的であることの正当性を求め、「なぜ道徳的であるべきか」と先の問いを問うことは無意味といえるのである。ノディングズが言うように、ケアリングの倫理において「道徳的観点は、どんな正当化の概念よりも先行している」(p.95)のである。

一方、先の問いを動機づけの意味合いで問うなら、ノディングズは次のように雄弁に答えてくれる。そもそも自然なケアリングの関係は、「私たちが切望し、追及しているあの状態」なのであり、「私たちに道徳的でありたいという動機づけを与えるもの」(p.95)なのである。そしてさらに、「私たちが道徳的でありたいと思うのは、ケアリングの関係にとどまり、ケアする人としての自分の理想を高めるため」であって、「こうした倫理的理想こそ、・・・私たちを努めて他の人と道徳的に接するように導く」(p.95)からなのである。

五. これまでの考察と道徳教育

フランケナは『道徳についての思考』の中で、道徳教育における哲学者の役割について論じている。

本稿の第一節でも確認したように、道德教育は、単に若い世代へと伝統的な道德的価値体系を伝える「社会化と文化適応のプロセス」と見られがちである。しかし、フランケナは、「哲学者の描くそれは、正当な修正と再編成のための用意がある」(p.125)とする。フランケナは、道德教育は「道德的な意味で人々を『氣高く自由』にすることを目指すべきだ」(p.126)と述べている。

しかし、本稿の考察を振り返るなら、そもそも「なぜ私は道德的であるべきか」という問いに対し、フランケナは十分に答えることができていない。先に見たように、この問いは、道德的であることを選択する特質を人はどのようにしたら備えるようになるのか、という問いにかかっている。先の問いは、道德教育にゆだねられる必要があるように思われるが、しかしフランケナは道德教育について論じているにもかかわらず、この点に関しては何も論及していない。

一方、ノディングズは、ケアリングの関係を人間の存在論的基盤として、また倫理的基礎として位置づけることにより、ケアする人が自然的ケアリングに依拠しながら倫理的自己として立ち現れてくる様を示している。ノディングズは、道德的判断や推論を問題とする「男性の声」の根底にはケアリングの関係があり、その関係に基づく倫理的理想こそ、道德であることを動機づけると考えるのである。

ノディングズは、「すべての教育の第一の目的は、こうした理想を育むことでなければならぬ」(p.6)と主張する。結果として、ノディングズのケアリングの倫理は、道德教育への強調を生むとともに、道德教育との補完的な関係の中に開かれているのである。

おわりに

本稿では、「なぜ道德的であるべきか」という問いをめぐり、その正当化や動機づけについて、フランケナの議論およびノディングズのケアリングの倫理を取り上げて考察してきた。本稿の考察が示しているのは、「なぜ私は道德的であるべきか」という問いに対して、ノディングズの議論が説得力のある説明を展開しているということである。彼女のケアリングの倫理は、ノディングズ自身がその思索を教育の分野に展開していることから見ても、道德教育に対し一定の理論的支柱を提供しているといえよう。

しかし、彼女のケアリングの倫理には批判も多い。ヘルガ・クーゼは、ノディングズの倫理を看護の場面における規範理論として考察し、倫理理論としては問題があると批判している。また、ノディングズ自身も「倫理学は正当化された行為の研究である」という同僚からの批判を受けて、「これ

は倫理学の一部なのか。倫理学がこの「一部なのか」と自問している (p.95)。彼女の「ケアリングの倫理」を伝統的な倫理学との関係においてどう評価し位置づけるべきかについては、未だ論争の多い課題である。しかし、倫理、道德教育、そして倫理学の関係を考察する上で、ノディングズによる取り組みは一つの足がかりを提供しているといえるのではないか。

注

- (1) 「道德」と「倫理」の意味の相違については、前者を個人の内面的な規範として、また後者を社会的な広がりまでも含む規範として理解する見方がある (例えば、村田昇「道德の指導法」玉川大学出版、一五頁)。しかし本稿では、区別なく言い換え可能な語句として扱うこととする。ただし、義務教育を中心とした初等中等教育段階においてなされるものについては、慣例に従い「道德教育」とする。
- (2) 拙論「バイオエシックスの再検討のために―生命倫理教育との関わりから―」淑徳大学総合福祉学部研究紀要第四一号、二〇〇七参照。
- (3) 文部科学省『小学校学習指導要領』平成二〇二年三月、「第一章 総則」の「第1 教育課程編成の一般方針」を参照。
- (4) 「生命に対する畏敬の念」についての記載。「生命に対する畏敬の念は、人間の存在そのものあるいは生命そのものの意味を深く問うときに求められる基本的精神であり、生命のかけがえのなさに気付き、生命あるものを慈しみ、畏れ、敬い、尊ぶことを意味する」。
- (5) 文部科学省『小学校学習指導要領解説道德編』平成二〇二年八月、二五頁。
- (6) こうした問題は初等・中等教育段階における道德教育だけでなくとどまるものではない。大学においても「生命倫理」を受講する理由として「いのちの大切さについて知りたかったから」と答えてくる学生は少なくない。彼らの期待は倫理についての学的探究というよりも、むしろ道德的価値そのものについて学ぶことである場合も多いように思われる。
- (7) 江口聡「品川哲彦『正義と境を接するもの』への質問」<http://meisande.cs.kyoto-wu.ac.jp/eguchi/papers/sinagawa-care2008.pdf> (2010.9.2取得) 六頁を参照。
- (8) 「デューイー＝ミード著作集10 倫理学」人間の科学社、二〇二一。次の注9の他に、中戸義雄・岡部美香編『道德教育の可能性』ナカニシヤ出版、二〇〇五、五頁。林泰成「新訂 道德教育論」放送大学教育振興会、二〇〇九、十頁など。
- (9) 加賀裕郎「第一章 道德と道德教育」(佐野安仁・荒木紀幸編『道德教育の視点』晃洋書房、一九九〇所収)。
- (10) 安彦一恵・大庭健・溝口宏平編『道德の理由』昭和堂、一九九二、「まえがき」を参照。
- (11) 前掲書、さらに大庭健・安彦一恵・永井均編『なぜ悪いことをしてはいけないのか』ナカニシヤ出版、二〇〇〇を参照。特に前者の「第三章『道德の理由』―三つのブック・ガイド―」からは大変多くの教示をえた。
- (12) William K. Frankena, *Ethics 2ed*, PRENTICE-HALL, INC., Englewood Cliffs, New Jersey, pp.114-116. (邦訳: W・K・フランケン「倫理学」培風館、一九七五・一九三頁・一九七頁)。以下、原典からの引用ページについては、本文中に記す。
- (13) 「なぜ道德的であるべきか」という問いの分類については、フランケナの『道德についての思考 倫理と合理性』東海大学出版会、

一九九五における四分類と異なる。

- (14) Kai Nielsen, "Why Should I Be Moral? Revisited," *Why be moral?*, Prometheus Books, 1989. の問いについては、特に K・ニールセン以降「なぜわれわれは道徳的であるべきか Why should we be moral?」という問いと「なぜ私は道徳的であるべきか Why I should be moral?」という問いの二つに分けられて問われることとなった。

- (15) ウィリアム・K・フランケナ『道徳についての思考 倫理と合理性』東海大学出版会、一九九五。以下、引用については、本文中にページ数を記す。

- (16) Nel Noddings, *Caring A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, University of California Press, 1984. (邦訳：ネル・ノディングズ『ケアリング 倫理と道徳の教育―女性の視点から』晃洋書房、一九九七)

引用箇所については、本文中にページ数を記す。訳文については邦訳を参考にしつつ、必要がある場合には適宜改めた。

- (17) 諸事物や諸観念についてのケアは、「美的ケアリング (aesthetical caring)」と呼ばれる。ノディングズは、この美的ケアリングによって自然なケアリングや倫理的なケアリングが増幅、歪曲、減殺される可能性について言及し、重要な問題圏であることを指摘している (p.36) が、本稿においては論究する余裕がない。

- (18) ヘルガ・クレーゼ『ケアリング―看護婦・女性・倫理』メディカ出版、二〇〇〇。特に第七章を参照。

- (19) この点については、次の著作とそれに続く論争 (注6参照) から多くの示唆を与えられた。品川哲彦『正義と境を接するもの―責任という原理とケアの倫理―』ナカニシヤ出版、二〇〇七。